



Title	雨龍地方演習林のタケノコ山の開放と利用：地域と演習林のあり方プロジェクト
Author(s)	金子, 潔
Citation	北海道大学演習林試験年報, 14, 37-41
Issue Date	1996-09
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73237
Type	bulletin (article)
File Information	1995_1A-10.pdf



[Instructions for use](#)

I A-10 雨龍地方演習林のタケノコ山の開放と利用 — 地域と演習林のあり方プロジェクト —

雨龍地方演習林 金子 潔

1. 報告の課題

かつて木材生産の対象として利用されてきた森林は、その公益的機能、特にレクリエーション利用に対する要望が高まってきている。昭和40年代後半からのモータリゼーションと森林内の林道整備によって、周辺住民は積極的に山菜取り、キノコ採取、林内散策などで森林のなかに入る機会が多くなっている。特に、最近では週休2日制の定着と共にこの傾向はますます強まっている。雨龍地方演習林ではそういった要望に応えるべく、周辺住民を対象に林内見学、山菜採取、野鳥観察などに広く森林を開放してきた。だが山菜採取の中でもタケノコ採取は、入林者の増加に伴い交通整理、行方不明者の対策などの問題が生じている。

本報告ではタケノコ山開放について、雨龍地方演習林に保管されている入林者名簿に基づき入林者の傾向を分析するとともに、地域住民と演習林のあり方や、開放に伴ういくつかの問題点について考察する。

2. タケノコ山開放の経緯

雨龍地方演習林では419林班（通称三角点）をタケノコ山として地域住民に開放している。タケノコ山開放の経緯は、演習林元職員からの聞き取り調査によると、昭和52年以前から1年に数人の地域住民が雨龍地方演習林にタケノコ採取に訪れていた。昭和52年に天然更新試験地林道（通称三角点林道）が新設され、それらの地域住民に対して三角点周辺まで車での入林を許可するようになった。当時、隣接する道有林美深林務署の森林では、タケノコ採取の入林をすでに広く認めていたため、道有林に入林した人の中から歩いて演習林に越境する者がかなりいたといわれている。そして雨龍地方演習林に対して次第にタケノコ採取の入林許可を求める人が多くなってきたため、昭和55年からその人たちの入林を認めることとした。

当時のスタイルは、入林許可証は原則として演習林職員の勤務時間内（8時30分～17時）に母子里作業所で発行した（週休2日制になってからは月曜日～金曜日に許可証を交付）。しかし入林者が急増し、なかには早朝3時頃から入林許可証の交付を求めて作業所を訪れる人も出てきたので、平成元年よりタケノコ最盛期の数日間に限り、林道の門扉を開放して、門扉横に設置している入林者名簿に必要事項を記載して入林するスタイルに変更した。平成元年は演習林職員の勤務時間に合わせて午前8時30分に開放したが、林道入口から国道275線まで車が連なってしまう、一般の通行に支障をきたした。そのため翌年からは午前4時に開放することにした。

こうした経過の中で演習林はタケノコ山開放の情報を外部には一切、宣伝しなかったが、入林者の口コミによってその情報が次第に広く近隣に知られてゆくようになり、開放日、開放期間などについて電話での問い合わせが年を追う毎に多くなっている。

3. 入林者名簿の分析

入林者名簿の記載項目は日付、名前、住所、人数、車両番号、入林時刻、下山時刻である。入林者名簿に記載されている各項目にしたがって開放日別、地区別、滞在時間別、グループ別の人

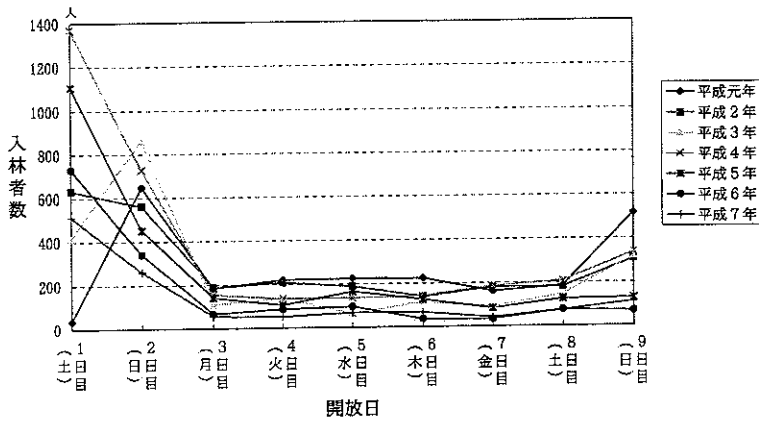


図-1 開放日別入林者数の推移

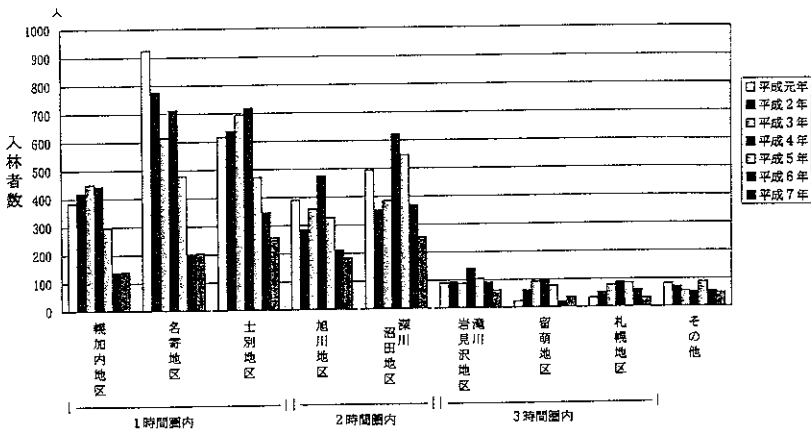


図-2 地区別入林者数の傾向

数に分類してそれぞれグラフ化し、平成元年～平成7年までの入林者の傾向を分析した。入林者名簿に記載された1シーズンの入林者総数は2,000人～3,000人前後である。各グラフ毎に入林者総数に違いが生じているが、これは入林者が項目によって記載しない場合があるからである。また入林者がそもそも入林者名簿に全く記載しないケースもあるため、実際には入林者名簿に記載した人数よりも多くの方が入林していると思われる。

1) 開放日別入林者の推移

平成4年から原則的には土曜日を開放初日とし、次の週の日曜日までの9日間にわたって開放している。平成元年から平成3年までは開放期間が一定してないが、平成4年からのデータと合わせるために、本論では入林者のピークを含む土曜日から次の週の日曜日までのデータを使用した。平成元年から平成3年までは開放2日目の日曜日に入林者が集中しているが(図-1)、これは週休2日制が一般に定着していなかったからだと考えられる。週休2日制が民間企業にも導入されるようになった平成4年からは、開放初日の土曜日に入林者が多い傾向が見

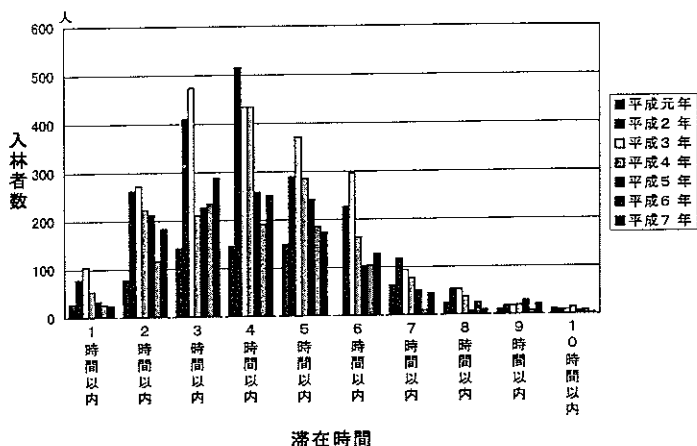


図-3 滞在時間別入林者数の割合

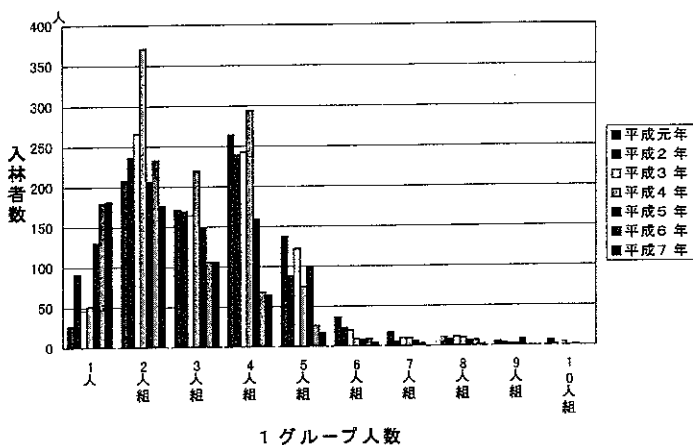


図-4 グループ別入林者数の割合

られる。また開放初日の土曜日か翌日の日曜日に入林者が多いもうひとつの理由は、例年タケノコの最盛期にあわせて開放初日を設定しているからである。

年毎の入林者の変動が大きいのは、平成7年のように士別・朝日・和寒・比布・愛別の境界にまたがる笹の平地区（国有林）や名寄のピヤシリ地区（道有林）のタケノコ開放日と演習林の開放日が重なったため、演習林の入林者が少なくなったからと考えられる。

2) 地区別入林者の傾向

入林者のうち最も多いのは名寄地区で、平成元年の924人を最高に、7年間の平均で454人である（図-2）。また名寄地区、士別地区、幌加内地区など車で1時間以内の地域からの入林者が全体6割を占めているが、笹の平、ピヤシリ等と開放日が重なる年では3割程度に減少している。次に多いのは車で1～2時間の旭川地区と深川・沼田地区である。いずれにしてもこれら2時間圏内の入林者は例年、合計2,000人前後にのぼり、全体の7～8割に達する。このほか2時間を越える滝川・岩見沢地区や札幌地区などからの入林者も見られる。

3) 滞在時間別入林者の割合

いずれの年も3、4時間滞在する人が最も多く、それらを含め5時間以内の人が約8割を占めている(図-3)。しかし中には10時間以上滞在する人もわずかながら見られる。

採取するタケノコの量によって滞在時間に差が見られると思われるが、1~2時間圏内の周辺地域の入林者は開放期間中に2度ないし3度、演習林を訪れ、そのつど2~5時間採取するケースが多い。また遠方から入林する人は長時間、なかには6時間以上も採取し、大量に確保して下山する。したがって車で2時間以上の遠方からの入林者は長時間滞在型である。

4) グループ別入林者数の割合

グループの人数では2人~4人で車1台もしくは2台で入林するパターンが最も多く(図-4)、これらの人は、家族連れや仲間同士で車にタケノコを積める範囲内での採取を目的にして入林しているようである。また10人以上で入林するグループも毎年あり、これらは地元の町役場や消防団等、職場ぐるみの人たちである。

4. 地域住民と演習林のあり方

演習林ではタケノコ山を開放することによって、地域住民の森林レクリエーション要求に一定程度応えていると考えられる。演習林への入林者の多くは名寄地区、士別地区、幌加内地区を中心とした車で2時間以内の周辺地域の住民である。その意味から、従来より演習林と深く関わってきた地元住民ばかりではなく、今後はこうしたレクリエーション利用によって、周辺地域住民とのあいだにも演習林との関係を築き、演習林の運営に理解を深めてもらうことが重要であると考えられる。入林者の中には演習林の存在は知っていても何をやっているのかわからない、と言う人も見られるが、タケノコ山の開放を通じて演習林の存在や本来的役割を社会的にアピールすることが可能と思われる。

しかし、これまでにタケノコ山の開放によりいくつかの問題が生じてきた。それは1) 入林者のマナー、2) 行方不明者の対策、3) 林道及び駐車場の整備、維持管理、4) 職員の負担などである。

1) 入林者のマナー、特にゴミ対策については当初ゴミ箱を設置し「ゴミは投げないで下さい」と看板を出していたが、ゴミ箱に入れない人が多かったようである。現在ではゴミ箱を撤去して、ゴミは持ち帰ってもらっている。

2) 行方不明者の対策については、入林の際、入林者名簿に名前を記載しても、帰りには下山時刻を記入しない人がかなりいる。このような人たちの下山を確認するため、門扉閉鎖時刻には下山もれを防ぐため拡声器で下山を促すと共に、車の存在を確認しながら巡視を行っている。奇妙にも、入林者名簿に記載しない人の中から行方不明者の出るケースが多い。こうした人たちは「森林に慣れている」、「絶対、迷子にならない」といった安易な気持ちが強いようである。年間4件ぐらい行方不明が発生し、警察に連絡した年もある。

今後は入林者名簿に必ず記載してもらおう事と、そのほかにも何らかの対策をたてる必要がある。

3) 林道及び駐車場については、タケノコ採取に訪れる人が多くなるにつれて整備、維持管理を行ってきた。すなわち、林道は拡幅を行い、林道脇に駐車してもその横を車が走行出来るようにした。また所々に待避所を設け、対面通行を容易にした。平成元年には三角点の駐車場を拡張して、多くの車とその地点まで行けるようにした。しかし開放初日は入林者の車が駐車場、林道の収容限度を越える状況になっている。こうした入林者の増大に対してどのような対策を講じるか、すでに大きな問題になっている。

4) 職員の負担については、平成元年以前は職員の勤務時間内に限ってタケノコ山を開放していたが、入林者の強い要望があり今日の開放形態になっている。今後とも現状のスタイルを継続していく事が望ましいと思われるが、門扉の開閉、林内巡視などが土日と重なるために職員の負担となっている。そのため負担軽減に向け何らかの有効な対策が必要であると考えられる。

*) この研究は、雨龍地方演習林長期計画課題「北海道北部の地域経済と地域社会に関する研究」の一環として実施した。調査等に携わったメンバーは以下のとおりである。

雨龍地方演習林：金子 潔・高島 守・上浦達哉・高橋廣行・鷹西俊和・秋林幸男・大高良光・菅原 博・
今井正昭・田辺良平・木下恵二郎・市川春矢・麻木勝美・渡辺和行・石原道男・原 臣史・
笹原敏幸・大森正明・俵 清美

中川地方演習林：奥田篤志・神沼公三郎

演習林（札幌）：松田 彊